

熊本博物館所蔵の「横矢旗」について

竹原 明理

一．はじめに

熊本博物館（以下、当館）では、令和三年（二〇二一）より収蔵絵画調査を実施した。令和六年（二〇二四）三月には、『熊本博物館収蔵 絵画目録（一）』を刊行した。本調査によって、当館にはさまざまな絵師の作品が多数収蔵されていることが改めてわかってきた。

そのうちの一作、椿椿山画・深水春山賛『深水春山像』については館報34号で紹介し¹、令和六年度の収蔵品展『くまはくコレクション』かがやけ！熊本の刀と絵画』でも多数の絵画を展示した²。

本稿では、長らく当館に所蔵され、定期的に公開の機会がなかった「横矢旗」八点について報告し、若干の考察を加えたい。

二．「横矢旗」とは

横矢旗は、端午の節句の飾りの一種で、縦が七〇～一〇〇cm程度、横が長いもので十数メートルにもなる巨大な絵巻のようなものである。そもそも「横矢旗」という語はあまり知られてはいないだろう。文献検索をしても、当館館報に掲載された展示記録がヒットする程度である。端午の節句や鯉のぼりに関する研究は多数あるが、横矢

旗に関する先行研究はほぼ無いのが現状である。当館では「横矢旗」という語を違和感なく使用してきたが、そもそも横矢旗とは一体どのようなものなのか、現状わかっている範囲で記しておきたい。

『熊本県大百科事典』（熊本日日新聞社熊本県大百科事典編集委員会編、一九八二年）を引くと、横矢旗は「矢旗」の項にその一種として記載され、端午の節句に飾ったものとわかるが、詳しい説明はない。『新熊本市史』（別編第二巻、一九九六年）には、昭和六二年（一九八七）に白石巖氏（一九二一～一九九五）³が現在の熊本市中央区京町の民家で撮影した飾り付けの様子が掲載されている。横矢旗の使用例を記録したほぼ唯一の



【写真1】

写真として大変貴重だが⁴、本文中での説明はない。なお、本画像のポジフィルムは現在、熊本県博物館ネットワークセンターに収蔵されている。『新熊本市史』掲載画像とやや画角が異なるが、同時に撮影された画像の一つを本稿にも掲載する【写真1】。乳に紐を通し、ぐるりと屋根下に廻して飾り付けられている様子がよくわかる。

次に、「横矢旗」という語の使用についても見ておきたい。たとえば、熊本県立熊本高等学校の初代校長・野田寛（一八六六―一九四五）による口述を記録した『肥後文教と其城府の教育』（一九五六年）には、「かの明治の時代まで町家に横矢旗が張られ、今日端午の節句に金時、桃太郎は言ふに及ばず、勇ましき武者絵の幟の翩翻たるを見る時、武士の感化が如何に普ねく徹底してゐるかゞ想察せらるゝ」とある⁵。野田は、横矢旗は明治期のもので、以後は金太郎や桃太郎などの武者絵の幟を掲げるのが主流となったと認識していたことがわかる。

一方で、大正二年（一九一三）四月一八日付『九州日日新聞』では、「玩具のいろく」と題して、新町二丁目（現在の熊本市中央区新町）にあった炭谷玩具店の店頭に並ぶ夏用玩具を紹介する中で、「横矢旗は一間もので一円四、五十銭とこれも立派な絵である」と伝える⁶。同記事からは、横矢旗の当時の具体的な値段がわかるが、一間を約一・八二mと換算し、現存する横矢旗が数メートルになることを考えると、一間単位の長さで注文を受けていた可能性もある。

以上のように、新聞記事等で普通に「横矢旗」という言葉が使われていることから、少なくとも明治・大正期の熊本城下町では、端午の節句の際に横矢旗を飾る風習があり、その用語も一般に知られていたと考えることができる。しかしながら、現在はその存在を知る人はほとんどいない。本稿執筆にあたり、県内の節句用品や玩具を取り扱う店舗にも問い合わせたが、残念ながら情報は得られなかった。

三．当館収蔵品の概要

では、実際にどのような横矢旗が存在したのか、当館が収蔵する八作品の各情報を整理しておきたい。作品名・法量等の情報は【表1】のとおりである。当館収蔵品DBの情報を確認する限り、これらは一九六〇年代後半から七〇年代にかけて当館に寄贈されたと考えられるが、残念ながら寄贈元の記録が残っていないものも多い。寄贈元の情報があるものでも、旧蔵者の転居など本来伝来した地域と異なる場所からの寄贈である可能性もある。とはいえ、ほとんどが熊本城下からあまり離れていない地域から寄せられたものである。

作品は、いずれも全体を厚めの和紙で仕立て、濃藍色などに染めた紙や布で本紙を縁取りし、縁と同じ材で主に本紙の上部に紐を通すための乳がつくというのが共通する形状である。紙製とはいえ、【写真1】のように主に屋外で使用するため非常に丈夫に作られているが、繰り返し使用や降雨による水損などで本紙の破れなど劣化が著しい。今後の修理や保管方法など、検討すべき課題は多い。以上を考慮したうえで、各作品の概略を見ていく。

① 松岡敬廉《山崎合戦図》 一巻

冒頭の破損が甚大だが、「文管斎」「敬廉之印」という二つの印を確認することができ、本作の作者は松岡敬廉という絵師であることがわかる。敬廉は、熊本藩御用絵師・矢野家の六代・良敬の弟子である。安政六年（一八五九）生まれで、父祖は狩野派を学んだ絵師であった。本名を「七郎」といい、号に「観山」「文管斎」「皓月庵」などが

あり、後に「来茂」と改名した⁷⁾。敬廉の作品としてはほかに、『熊本城南面大観図』（熊本城頭彰会蔵・当館寄託）、『藤崎八幡祭礼絵巻』（島田美術館蔵）のほか、同じく矢野派の赤星閑意・松山敬誠との共作『群芳帖』（永青文庫蔵）などが確認されている。

本作は、明智光秀勢と羽柴秀吉勢が衝突した「山崎の戦い」（一五八二年）を描く。庶民に広く読み親しまれた『絵本太閤記』などを基にし、清正に関する逸話をメインに構成したものとなっている。冒頭の場面は、明智勢と羽柴勢の激突が始まった様子を描く。主要な人物には、「比田帯刀」「斎藤倉之助」「明智光秀」「阿部仁右衛門」「高山右近」「羽柴秀吉」など武将の名前を記した紙が貼付されている。羽柴勢のやや後方には「加藤虎之助」（清正）の名も確認できるが、どの人物かは特定しづらい。

次の場面は、優勢になった羽柴勢が明智勢を討つ様を描き、加藤虎之助が斎藤倉之助に馬乗りになっているところ、蔵之助の父・斎藤伊豆守が息子を助けようと虎之助を攻撃しているとれる描写や林半四郎に苦戦する羽柴勢の描写がある。

最後は、光秀が敗れたことを知った明智左馬之助（秀満）が馬で琵琶湖を越えたという伝説の場面を描く。湖岸に左馬之助を逃してしまった羽柴勢がいる⁸⁾。

② 矢野派《九州平定図》 一巻

当館収蔵品DBによると、本作は昭和四五年（一九七〇）に現在の熊本市中央区新町四丁目の個人から寄贈されたものである。

作者は特定できないが、筆致から矢野派の絵師によるものと推定される。天正一五年（一五八七）の豊臣秀吉による島津氏制圧の様子を描く。これもまた庶民に広く読まれた『豊臣鎮西記』『絵本太閤記』『賤岳合戦記』などを基にしつつ、清正の逸話を主軸に構成されている。

本作も冒頭の破損が甚大だが、「秀吉御九州下向」と記された金紙が貼り付けられ、九州へ向かう船団が描かれている。秀吉が乗船する五三桐紋の帆を掲げた船の隣には、蛇の目紋を据えた清正の船が陣取っている。

小倉城に入った秀吉一行は、小倉城内で相撲を観覧する。土俵に立ったのは、清正家臣の木村又蔵と毛谷村六介（のち貴田孫兵衛）である。六介は、又蔵に敗れたことにより清正家臣になったという。その後、『築前岩関之城』^{マヤ}「蒲生氏御遠巻」の場面を経て、清正と赤星太郎兵衛（親武）の対峙が描かれている。清正家臣の森本儀太夫と木村又蔵も大急ぎで駆けつけている。太郎兵衛は、菊池氏の一族から出た家柄で、後に加藤一六将の一人に数えられた武将である。

さらに場面は進み、清正と島津勢・新納武蔵守（忠元）との戦いが描かれ、忠元を加勢すべく、川上左京太夫（忠堅）が駆けつける。忠元の落馬は清正にとってチャンスだったが、清正はあえて忠元を討たなかったという逸話を表す場面である。

川内川の戦いの後の場面には、「秀吉公泰平寺出座」との貼紙があり、泰平寺において島津義久・義弘が秀吉に降伏する場面を描く。一

番最後は、「筥崎八幡宮九州大名知行配当」として、筥崎宮に諸大名が集結し、領地を分配する光景が描かれる。

③ 矢野派《賤ヶ岳合戦図》 一巻

本作は、羽柴秀吉と柴田勝家が衝突した賤ヶ岳の合戦（一五八三年）のうち、清正の働きをクローズアップして描いたものである。特にこの戦いで清正は「賤ヶ岳の七本槍」に数えられ、清正の武功を語る上で代表的な合戦の一つである。

本紙に大きな破損はないものの、乳が全てガムテープに置き換えられている。繰り返し使用する中で、本来の乳が劣化・破損したため付け替えたのだろう。「賤ヶ岳の七本槍」に数えられる武将の戦功を中心に描かれているが、登場人物や場面は次に記す④の横矢旗と内容や構図が近似している。

④ 矢野派《賤ヶ岳合戦図》 一巻

当館収蔵品DBによると、本作は昭和四二年（一九六七）に現在の熊本市西区春日（旧・春日町）の個人から寄贈されたものである。③と同じく賤ヶ岳の戦いの様子を描いているが、各武将の名前を記しているためわかりやすい。本作も岩の描き方などから矢野派の絵師によるものと推定できるが、人物表現は拙い。

冒頭に蛇の目紋付の長烏帽子を被り、戸波隼人を討ち取る清正の姿がある。その右隣で笹を構えるのは「木村又蔵」となっている。その上部には加藤嘉明が浅井吉政を討つ様子を描く。画面を左に進む

と、上部では平野長泰が「柴田権六〇〇」と松村友十郎を討ち、下部では脇坂安治が鷲見源吾を崖から突き落とす。その左上段では、桜井佐吉が宿屋七左衛門と対峙する様子とそれを見て次の戦いへ備える粕屋武則（作中の矢旗には「粕谷助右〇門宗重」と記す）、その左側では、伊木半七（遠雄）が大寄戸右衛門を討つ様子がある。さらに下段では、福島正則と拝郷久盈の対峙、片桐且元と安彦孫左衛門、豊嶋以兵衛、長井五郎左衛門との対峙があり、さらに中川清秀と佐久間盛政の対峙が描かれている。いずれの場面も「賤ヶ岳の七本槍」となった武将たちの戦いの様子が象徴的に表されている。

⑤ 西村泰久《賤ヶ岳合戦図》 一巻

当館収蔵品DBによると、本作は昭和四三年（一九六八）に現在の熊本市中央区新町一丁目の個人から寄贈されたものとなっている。冒頭右下に「松契園主人画」の款記と落款印があり、矢野派の絵師・西村泰久の作と見られる。泰久は、矢野家六代・良敬の孫弟子にあたる絵師である。

③④と同じく、本作も賤ヶ岳の戦いを七本槍の武将らの戦功を中心に描くが、冒頭だけでなく最終場面で再び清正が登場し、山路正国ともみ合い崖から転がり落ちる様子加えられている。

⑥ 《日露戦況画報》ほか（印刷） 一巻

当館収蔵DBによると、本作は昭和四五年（一九七〇）に現在の熊本市中央区日吉二丁目（旧・高江町）の個人から寄贈されたものであ

る。

本作は、明治三十七年（一九〇四）に始まった日露戦争の戦況を伝える『日露戦況画報』『日露交戦実況』『征露実況画』などの彩色石版画を上下に二枚ずつ一〇列にわたって、計二〇枚を貼り交ぜて、横矢旗に仕立てたものである。おそらく、戦中に生まれた男児のために作られたのであろう。

糊付けのため発行元情報が不明なものもあるが、熊本市の「書画堂」、東京の「尚美堂」「名画堂」「松聲堂」「熊澤喜太郎」などを確認できる。また、多くの石版画を手がけた「宮野経茂」の名を確認できるものもある。

濱田辰次郎を店主とする熊本の「濱田書画堂」は、「九州一手特約発行元」となっている。大正一四年（一九二五）に刊行された『絵画絵葉書類付属品美術印刷製品仕入大観』（大日本絵葉書月報社）によると、同社は明治三二年（一八八九）に創業し、東京浅草蔵前三好屋書店より石版画を仕入れて販売を始め、明治三十七年（一八九四）に日清戦争の戦争画が発行されて以降、図書、額縁の専業店となった。店主の濱田辰次郎は安政三年（一八五六）生まれで、長男の治平（一八八一年生）に監督させた印刷部も「常に鮮明優秀なる美術印刷物の製作に多大の好評を受け」たという⁹。

⑦『救露討独遠征軍画報』ほか（印刷）

本作は、第一次世界大戦中に起きたロシア革命におけるチェコスロバキア軍団救出を名目とした、日本軍のシベリア出兵を伝える彩色

石版画『救露討独遠征軍画報』を横一列に九枚、さらに『教育日本歴史画』二枚、計十一枚を貼り付けて仕立てられている。いずれも「画作兼発行印刷者」として東京の尚美堂・田中良三の名が確認できる。

本作の寄贈元の情報は不明であるため、使用地等は不明である。裏打ち紙には未使用の領収書が使われている。

『救露討独遠征軍画報』は戦中に少なくとも一七場面刊行され、『教育日本歴史画』は大正元年（一九一二）前後から大正三二年（一九二三）前後にかけて複数刊行されたようである。本作で確認可能な発行元情報のうち、一番新しいものは大正八年（一九一九）一月であることから、本作は大正八年末もしくはそれ以降の間もない時期に製作されたものであろう。

これらの石版画の発行元である尚美堂の田中良三（一八七四―一九四六）は、昭和初期に川瀬巴水ら新版画の版元となったことでも知られる。『絵画絵葉書類付属品美術印刷製品仕入大観』（一九二五年）によると、田中は京都に生まれ、同地に本店を構える辻本尚書堂に勤務したのち独立し、明治三〇年（一八九七）に東京で尚美堂を創業した¹⁰。創業当初は絵画・額画・掛軸類の出版だったが、明治三三年（一九〇〇）に私製絵葉書条例が実施されると絵葉書の出版事業を積極的に展開したという¹¹。

⑧矢野派《三国志》 一巻

本作は、令和七年（二〇二五）一月に熊本市立古町小学校から新た

に寄贈いただいたものである。本作を納める箱の側面に「三国誌絵巻紙幟／杉谷雪樵筆／紫垣隆氏寄贈」との墨書を確認できる。

しかし、本作には款記がなく、登場人物や馬などにやや稚拙な表現が見られることから、熊本藩最後の御用絵師として知られる杉谷雪樵の作とは現時点で断定できず、矢野派系譜の末端に名を連ねる近代熊本絵師らによる作と推察する。なお、中国の故事にちなんだ横矢旗は、現時点で本作のみであり、他と趣向が異なる¹²。

旧蔵者の紫垣隆（一八八五―一九六六）は、現在の熊本市西区春日の生まれで、熊本の財界・政界の重鎮として知られた人物である。紫垣が現在の熊本市中央区九品寺に構えた邸宅「大凡荘」には教えを請いにさまざまな人物が出入りし、紫垣の自伝的著書『大凡荘夜話』には、県内外多数の著名人が言葉を書き寄せた。残念ながら、同書には本作製作の背景や古町小学校への寄贈の経緯などについては一切記されておらず、詳細は不明である。

四．当館収蔵の「横矢旗」から考えるいくつかの仮説

以上、当館が収蔵する横矢旗について概略を述べた。先述の通り、横矢旗に関する情報は大変少なく、いつ頃から作られるようになったのかや地域での分布など詳細は不明である。しかしながら、当館収蔵品や周辺情報を整理するかぎり、以下五点を仮説として考えることができる。

①横矢旗は幕末頃～昭和初期頃に作られたもので、京町や新町など熊本城下のごく一部の地域に集中して見られる風習と考えられる。

②明治時代に入り、藩御用という形態はなくなるが、横矢旗の製作には矢野派に連なる多くの在熊絵師たちが関わったと考えられる。

③横矢旗の製作工程や受注システムについては不明だが、少なくとも大正時代には玩具店を窓口として流通した可能性がある。④熊本という地域性から、加藤清正にちなむ物語の場面が好まれたが、ほかにも同時代の戦況画を題材にした作品も含まれることから、横矢旗には男児の健やかな成長だけでなく、将来戦地に向かった際の戦勝祈願も込められていたと推察される。⑤横矢旗に描かれたのは、物語の断片的な場面が多く、絵だけを見る限りでは物語の展開がつかめないため、端午の節句で飾られる際には、絵解きの役割を担う人がついた可能性がある。

依然として、横矢旗の出現時期や巨大化の理由や経緯など、不明な点が多く残っているが、これらの仮説を検証していくことで、今後、関連資料にたどり着くことを期待したい。

五．おわりに

以上、本稿では当館収蔵の横矢旗の概略を報告するとともに、今後の課題として五つの仮説を立ててみた。繰り返しだが、横矢旗に関する情報はあまりにも少なく、これらの仮説が今後検証可能かどうか、見通しが立たないのが現状である。

しかしながら、収蔵絵画調査によって数点でも絵師や発行元を確認でき、これまでほとんど言及されることとかなかった横矢旗の存在を本稿で紹介できたことは、今後の研究の一助となるに違いない。

筆者は、引き続き横矢旗に関する情報を収集し、今回立てた仮説を検証できればと考えている。

注

1 竹原明理「〈資料紹介〉椿椿山筆『深水春山像』について」（熊本博物館編『熊本博物館報34号（二〇二二年度報告）』二〇二二年、九五～一〇二頁）。

2 令和六年（二〇二四）一〇月四日～二月二日の会期で、前期と後期に作品を分けて展示した。

3 元熊本民俗文化研究会会長。熊本県内各地の民俗行事などを撮影・調査した。

4 横矢旗に関する語りがほぼ聞かれない中、当該写真が実際に昭和六二年時点でも行われていたものなのか、撮影のために再現されたもののかは一考が必要であろう。

5 野田寛『肥後文教と其城府の教育』（熊本市教育委員会、一九五六年、一四～一五頁）。

6 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史 史料編 第九卷』（熊本市、一九九四年、五三二～五三三頁）。なお、大正期の熊本の財界人や文化人を紹介した真栄里正助編『人物熊本』（増補版、新九州社、一九二三年）では、炭谷玩具店は、明治初年の創業で、新町二丁目角の目貫通りに店を構え、炭谷三伍を店主とし、次男の與平次が商才を発揮して経営も安泰であると紹介している。

7 松本雅明監修『肥後読史総覧』一九八三年、一〇七二頁。

8 本作では「堀尾勢」の紙が貼付されているが、正しくは「堀勢」のことと思われる。

9 『絵画絵葉書類品付属品美術印刷製品仕入大観』（大日本絵葉書月報社、一九二五年、三〇～三一頁）。

10 のちに「田中尚美堂」「東京尚美堂」とする。

11 前掲載書、八八～八九頁。

12 残念ながら本稿への掲載はかなわなかったが、さまざまな日本の神話や伝説を描いた横矢旗（個人蔵）も当館による過去の調査で確認している。

作者	作品名	法量（本紙）単位：cm	時代	目録番号	登録番号	資料ID	備考
① 松岡敬康	《山崎合戦図》	60.7×877.0	明治時代	249	22-15.223	61614	
② 矢野派	《九州平定図》	92.8×1303.1	江戸時代後期	250	22-15.220	61611	
③ 矢野派	《賤ヶ岳合戦図》	58.2×474.9	江戸時代末期	251	22-15.224	61615	
④ 矢野派	《賤ヶ岳合戦図》	74.9×468.8	明治時代初期	252	22-05.010	59342	
⑤ 西村泰久	《賤ヶ岳合戦図》	123.5×400.1	近代	253	22-05.009	58863	冒頭に「松裂園主人」の署名あり
⑥ -	《日露戦況画報》ほか（印刷）	95.5×596.5	明治時代	254	22-15.222	61613	<p>(1)列目 上段：「明治三十七年三月十日 露回教領口開戦詳報」 ※補付けのため発行元情報不明 下段：「仁川港外之海軍激戦詳報」 ※補付けのため発行元情報不明</p> <p>(2)列目 上段：「定州城占領／日露交戦実況」 (九州一手特約発行元 書道堂) 熊本市通町一番地 濱田口次郎) 下段：「日本海軍大勝利／旅順老大家戦」 (九州一手特約発行元 書道堂) 熊本市通町廿一番地 濱田口次郎) (東京市神田区一ツ橋通町十七番地 大光印刷 田中良三) (明治卅七年二月十日印刷同月十三日発行 東京市神田区〇〇五番地[一]定次郎)</p> <p>(3)列目 上段：「定州付近近戦／日露交戦実況」 (宮野経亮画) (発行所 東京市浅草区南松山町 名画堂) 下段：「旅順口大激戦／日露戦争実影」 (発行所 東京市浅草区南松山町 名画堂)</p> <p>(4)列目 上段：「日露戦況画報 第五号」 ※補付けのため発行元不明 下段：「征露実況画報中の九ノ広瀬中征露二回激戦詳報の行進」</p> <p>(5)列目 上段：「日露戦争画報 (五)／鴨緑江附近ニ於テ露軍敗走」 ※補付けのため発行元不明 下段：「征露実況画報中の六ノ我軍退避番号脱離を描寫す」 ※補付けのため発行元不明</p> <p>(6)列目 上段：「征露実況画報第六号」 ※補付けのため発行元不明 下段：「日露戦況画報 第四号」 (台口 古樹が兵) 〔聯合〕 東京市日本橋区通二丁目 松露堂)</p> <p>(7)列目 上段：「日露戦況画報 第四号」 (台口 古樹が兵) 〔聯合〕 (九州一手特約発行元 書道堂 熊本市通町廿一番地 濱田口次郎) 下段：「征露実況画報中の十ノ我軍鴨緑江を渡リ滿州に進入す」 (九州一手特約発行元 書道堂 熊本市通町廿一番地 濱田口次郎) (発行所 東京市日本橋区通二丁目 松露堂) (日本橋区通二丁目松二番地 中島石松 印刷者 日本橋区元大工町拾五番地 金子鐵口)</p> <p>(8)列目 上段：「九道戦附近の激戦／日露戦争実影」 (九州一手特約発行元 書道堂 熊本市通町廿一番地 濱田口次郎) 下段：「征露実況画報中の十一ノ九道戦攻撃露回教の激戦」 ※補付けのため発行元不明 (発行所 東京市浅草区南松山町 名画堂)</p> <p>(9)列目 上段：「征露実況画報中の十二ノ鴨緑江附近露兵の奮闘」 (九州一手特約発行元 書道堂 熊本市通町廿一番地 濱田口次郎) 下段：「日露戦争実況鴨緑江近戦之図」 (明治三十七年五月二十日印刷 同年五月二十五日 発行 著者兼発行人 東京市浅草区南松山町四番地 名画堂 宇田川政高 九州一手特約発行元 熊本市通町廿一番地 濱田口次郎)</p> <p>(10)列目 上段：「征露実況画報中の十三ノ金州附近の激戦」 ※補付けのため発行元等の情報は不明だが、「松露堂」の文字が確認できる。 下段：「第一旅隊激戦大進撃之図」 (宮野経亮画) (明治卅七年五月廿五日印刷／同年六月一日発行／東京日本橋区新右衛門口印刷業発行 熊澤喜太郎)</p>
⑦ -	《救露討独遠征軍画報》ほか（印刷）	52.7×571.0	大正時代	255	22-15.182	61359	<p>・(其一)「皇軍前進断絶 上陸を阻害暴徒狂勢の歡迎」(大正八年十一月一日印刷／同年同月五日発行／創作兼印刷発行者 東京市神田区一ツ橋通り町十六番地 田中良三／発行所 同所 尚美堂書店／電話(本局二千〇七一番)</p> <p>英題「THE ILLUSTRATION OF THE GREAT EUROPEAN WAR NO.1」</p> <p>・「滿州軍方面第一戦我軍激戦詳報を描寫す」※()内は同前</p> <p>英題「THE ILLUSTRATION OF THE SIBERIAN WAR NO.5」</p> <p>・(其六)「歩兵第十師連隊第十二中隊之殊戦敵の背後に迂襲し敵軍を破獲し使甲利軍を破獲す」(大正八年十一月一日印刷同年同月 日発行／五ノ創作兼印刷発行者／東京市神田区一ツ橋通り町十六番地尚美堂田中良三電話本局二〇七一番)</p> <p>英題田中良三電話本局二〇七一番)</p> <p>英題「THE ILLUSTRATION OF THE SIBERIAN WAR NO.6」</p> <p>・(其七)「勇猛果敢なる我騎兵は異軍北進敵を追撃して(ハバロフスク)を占領す」(大正八年二月廿日印刷同年同月廿五日発行／創作兼印刷発行者／東京市神田区一ツ橋通り町十六番地尚美堂田中良三電話本局二〇七一番)</p> <p>英題「THE ILLUSTRATION OF THE SIBERIAN WAR NO.7」</p> <p>・(其八)「露回教連合軍司令部攻撃之実果」(大正八年四月十五日印刷同年同月廿日発行／創作兼印刷発行者／東京市神田区一ツ橋通り町十六番地尚美堂田中良三電話本局二〇七一番)</p> <p>英題「THE ILLUSTRATION OF THE SIBERIAN WAR NO.11」</p> <p>・(其二)「露回教征軍攻撃之光景」(大正八年十月(未)十一月一日印刷同年同月五日発行／創作兼印刷発行者／東京市神田区一ツ橋通り町十六番地尚美堂田中良三電話本局二〇七一番)</p> <p>英題「THE ILLUSTRATION OF THE SIBERIAN WAR NO.12」</p> <p>・(其三)「露勇果敢なる許斐大尉の奮戦」(大正八年二月十六日印刷／同年同月廿日発行／創作兼印刷発行者／東京市神田区一ツ橋通り町十六番地田中良三／発行所 同所尚美堂書店／電話(本局二千〇七一番)</p> <p>英題「THE ILLUSTRATION OF THE SIBERIAN WAR NO.13」</p> <p>・(其五)「世界戦史に稀前の特異な露の戦艦隊に敵艦沈没す」(大正八年十一月一日印刷同年同月五日発行／創作兼印刷発行者／東京市神田区一ツ橋通り町十六番地田中良三／発行所 同所尚美堂書店／電話(本局二千〇七一番)</p> <p>英題「THE ILLUSTRATION OF THE SIBERIAN WAR NO.15」</p> <p>・(其七)「我軍空中及水陸攻撃し露回教の敵軍を掃討す」※補付けのため発行元情報不明</p> <p>英題「THE ILLUSTRATION OF THE SIBERIAN WAR NO.17」</p> <p>・「教育日本歴史画」(「大橋太郎畫家」) ※補付けのため発行元情報不明</p> <p>・「教育日本歴史画」(「南公梓井之興」) (大正八年十一月一日印刷同年同月五日発行／創作兼印刷発行者／東京市神田区一ツ橋通り町十六番地尚美堂田中良三電話本局二〇七一番)</p>
⑧ 矢野派	《三国志》	59.4×1370.0	明治時代初期	-	22-15.466	104680	2023年1月、古町小学校より新規寄贈。本作を納める本箱側面に「三国誌絵巻紙軸／杉谷雪樵筆／柴垣隆氏寄贈」の墨書がある。



①松岡敬廉 横矢旗《山崎の戦い》(部分)



②矢野派 横矢旗《九州平定図》(部分)



③矢野派 横矢旗《賤ヶ岳合戦図》(部分)



④矢野派 横矢旗《賤ヶ岳合戦図》(部分)



⑤西村泰久《賤ヶ岳合戦図》（部分）



⑥横矢旗《日露戦況画報》ほか（部分）



⑦横矢旗《救露討独遠征軍画報》ほか（部分）



⑧矢野派 横矢旗《三国志》（部分）